

日本音楽集団

第九十一回 ◆ 定期演奏会

卷頭言

アルプス席から

作品について

桜井偕子さんをお迎えして

邦楽現代ニュース

池辺晋一郎

三木 稔

芝 祐靖・田中悠美子

三橋 貴風

山形学校公演に参加して

長崎・五島の学校を巡って

蘇る「祭り」—サロンコンサートを聴いて

第八回日本音楽合奏フェスティバルを終えて

日本音楽集団の活動とご案内 他

稻垣 隆史

野口美恵子

茅島秀夫

水野正徳

1985年12月2日[月]午後7時開演
朝日生命ホール（新宿西口）

■主催 日本音楽集団・現代邦楽協議会

卷頭言

この十月末のことだが、エジプトのカイロでぼくのバレエを上演した。カイロ交響楽団。指揮は荒谷俊治氏。練習が続くある日、オーケストラの打楽器奏者の若いひとりが、ぼくに話しかけてきた。このオーケストラは一昨年もつき合つてメンバーは大体旧知だが、彼は初めて見る顔だ。「あなたにタンブリンとピアノのデュオの曲ありますか?」と彼はぼくに尋ねるのだ。タンブリンとピアノのデュオ? そんな曲あるわけない。「書いて下さい」と彼。そりや無理だ、書けないよ、とぼく。「何故?」「だってタンブリンのみとピアノなんて……」「どうして?」……。とうとう「考えてはみるけど」と言う破目になつたが彼は納得しなかつた。考えて、ではなく、書いてみる、と言つてくれ、と食いさがる。

タンブリンには実にさまざまなテクニックがあるんだ、それを知らないだろう、そのレクチャーレポートをするから時間をとつてくれ、と彼は言う。毎日ぼくは何やかやと忙しくて、その時間はとてもとれなかつた。が、最終日の終演後やつと確保したわずかな時間に聴かせてくれた彼のタンブリンは、見事にアラブ的で、信じられぬほど卓越したものだつた。「何か少し書いてみるよ……」と全く自信なげにぼくはつぶやいた。

エジプトの作曲家はなかなか書いてくれないのだそうだ。皆ヨーロッパを向いている。成程……とぼくは唸つた。唸りつづけつつ日本を想つていた。

この少し前、NHKの番組のレポーターとしてぼくは杉並区立第三小学校といふ所を訪ねている。子供たちが、邦楽合奏をやつっているのだ。茅原先生がそれを指導する。実際に生き生きと、本当に嬉しそうに楽しそうに子供たちが箏や三味線を弾いているのだ。ぼくは驚いた。びっくりした。だが、驚いていいのだろうか。

日本の伝統楽器に興味を抱く外国人が、日本の楽器のための作曲をする。エジプトのタンブリンの曲を日本人が試みるようだ。こいつは少し驚いたつてい。驚くことも必要だ。

だが、日本の作曲家が日本の楽器の曲を書くことや、日本の子供たちが日本の楽器を弾くことは本当は特別なことでも驚くべきことでもない。言ってみれば当たり前だ。現代邦楽は、試行錯誤から、ブームとまで言われた時を経、今や「当り前」の時代に入つたのではないか。「当り前」という埋没し易いことばに對し、逆に真正面から向い合い、「当り前」の価値の大きさを真剣に見すえていく時代に入ったのではないか。だとすれば、こいつは、おもしろい。

一、二つの舞曲

長沢勝俊作曲

〔笛〕	西川浩平
〔尺八I〕	坂田誠山・藤崎重康
〔尺八II〕	福田輝久・竹井誠
〔尺八III〕	米澤浩・素川欣也
〔三味線〕	野口美恵子
〔琵琶〕	田原順子
〔指揮〕	木村玲子・岡田寿子
〔笛〕	内藤洋子・熊沢栄利子
〔箏I〕	滝田美智子・内藤久子
〔箏II〕	宮越圭子・佐藤里美
〔十七絃〕	宮越圭子・佐藤里美
〔打楽器〕	藤舎成敏・堅田啓輝・細谷一郎
〔指揮〕	田村拓男
〔笛〕	尾崎太一・細谷一郎
〔三木 稔作曲〕	三木 稔作曲

二、北の詩

うた
東京初演

三木 稔作曲

〔笛〕	西川浩平
〔尺八I〕	坂田誠山・藤崎重康
〔尺八II〕	福田輝久・竹井誠
〔尺八III〕	米澤浩・素川欣也
〔三味線〕	野口美恵子
〔琵琶〕	田原順子
〔箏I〕	木村玲子・岡田寿子
〔箏II〕	内藤洋子・熊沢栄利子
〔箏III〕	滝田美智子・内藤久子
〔十七絃〕	宮越圭子・佐藤里美
〔打楽器〕	藤舎成敏・堅田啓輝・細谷一郎
〔指揮〕	田村拓男

三、夷曲

敦煌壁画と琵琶譜によせて

西綾樂

委嘱初演 芝 祐靖作曲

〔笛〕	藤崎重康・竹井誠
〔尺八〕	坂田誠山・米澤浩・素川欣也
〔笙〕	宮田まゆみ(客演)
〔簫簫〕	高桑賢治(客演)
〔胡弓〕	畦地慶司
〔琵琶〕	田原順子
〔箏I〕	吉村七重・内藤洋子
〔箏II〕	宮越圭子・大畠菜穂子
〔十七絃〕	木村玲子・滝田美智子
〔打楽器〕	尾崎太一・堅田啓輝・細谷一郎
〔指揮〕	田村拓男

四、古代舞曲によるバラフレーズ

三木 稔作曲

〔笛〕	西川浩平
〔尺八I〕	福田輝久・水谷雅康
〔尺八II〕	三橋貴風・米澤浩
〔三味線〕	加藤洋
〔琵琶〕	半田淳子
〔箏I〕	吉村七重・滝田美智子
〔箏II〕	木村玲子・熊沢栄利子
〔十七絃〕	宮越圭子・内藤洋子
〔打楽器〕	尾崎太一・藤舎成敏
〔ソプラノ・ヴォーカリーズ〕	桜井偕子(客演)
〔指揮〕	田村拓男



桜井千代子

とも

東京にて生れる。幼少の頃より音楽的教養を家庭にて受ける。七才よりヴァイオリンを中島鶴子師に師事。高校時代浦口照子氏に声楽を師事。立教大学独文科中退。在学中同大オーケストラ、コンサートマスターをつとめる。一九七二年よりリオデジヤネイロのブルジル・シンフォニー・オーケストラにて二年間ヴィオラ奏者をつとめ、その間声楽のブラジル国内コンクールにて三位入賞。一九七四年指揮者クルト・マズアと結婚。一九七五年より、東独ライプツヒ市音楽院、フェリックス・メンデルスゾーン（バルソロディ）音楽院にて声楽を学ぶ。一九八一年同音楽院卒業以来、東独国内及びソ連、チエコスロバキア、日本などにて、リートとコンサート歌手として特徴ある活動をしている。

また、一九八四年にはアルテンブルクにおいてマダム・バタフライを一年間公演、好評を博した。

宮田まゆみ

国立音楽大学ピアノ科卒業、一九七五年より雅楽を多忠磨氏に師事。国立劇場雅楽公演、NHK古典芸能鑑賞会、現代曲の公演等に出演、また今までに二回の笙によるリサイタルを行ない好評を博した。一九八三年にはヨーロッパにおける日本芸術祭に参加。

夷曲「西綾樂」—敦煌壁画と琵琶譜によせて—

近年、テレビや書物において、シルクロードの国々の様子が度々紹介され、雅樂のルーツとして想像の中だけの存在であった西域が、急に身近なものとして感じられるようになつた。雅樂人の一人として大変有難たく思つてゐる次第である。

今回、日本音楽集団より作品の委嘱を受けたおり、迷わずテーマとしたのが、以前より温ためていた敦煌千仏洞壁画の「胡旋女舞図」「飛天奏楽図」などのイメージと、第十七窟より発見された琵琶譜（パリ国立図書館蔵）の中の旋律である。

さて曲は、砂漠の中の千仏洞を表わした静かな序奏にはじまり、敦煌の風に聽く唐代の樂の音へと続く。そして洞内へ進むと西域風の壁画より、羊飼いの笛が聞こえ、次第に合奏となり、薄絹をなびかせた胡旋女の踊りとなる。舞曲「蘇羅密」（ソラミツ）が終ると、飛天の奏楽にうつり琵琶と笙が静かに奏し、次第に合奏となる。次に箏、十七絃によつて敦煌琵琶譜「傾盆樂」の終曲「急曲子」の旋律が奏され、合奏となるが、これは、唐代舞曲の再興を試みたものである。

夷曲（ひなぶり）は外国風の音樂を示し、「西綾樂」は西方の綾羅と音樂、という意味をもつてゐる。

初演に際し、日本音楽集団の皆様はじめ、笙の宮田まゆみさん、築築の高桑賢治氏が熱意をもつて取り組んで下さり、拙作を盛り上げていただいたことに深く感謝する次第である。

（芝祐靖）

二つの舞曲

一九七〇年十月、集団の第十二回定期演奏会で初演された、作曲者の作品の中でも最大編成の曲です。時に集団創立六年目、アンサンブルの質・量とともに飛躍的發展を遂げつつあつた状況とより多彩な音色、ダイナミズム、表現力を求める作曲者の欲求とが一致して実現した曲といえましょ。日本の民族芸能の中にある「舞い」や「踊り」を素材として自分なりに消化し、自らの言葉を用いて民衆のエネルギーを表現したかったということです。

曲は、対称的な二つの章からなっています。第一章は、ゆるやかで旋律的な「舞」的因素を持ち、深い悲しみを、静・動・静という三部形式で二元的に表現しています。第二章は激しく律動的な「踊り」的因素を持ち、跳躍的リズムの上にメロディーをのせて、ダイナミックな群舞の響宴を表わしています。

作曲者が日頃から愛情を持ち続けている日本の民俗芸能や民芸品。それらが持つてゐる原点を振り所に、我々日本民族の共通項を、日本の樂器を用いて表現したい……「人形風土記」に始まる一連の創作姿勢の延長線上にある作品で、この流れは「大津絵幻想」へとつながっていくのです。

北の詩—ダンス・コンセルタントⅣ—

（一九八一年十一月、札幌で上演された日本舞踊劇「四季絵巻北海道—天と地と人—」（北海道放送二十周年、北海道邦楽邦舞協会十周年記念作品）のうち作曲者の担当部分

高桑賢治

一九五八年生れ。八二年東京芸術大学音楽学部作曲科卒業。在学中より芝祐靖氏の雅楽の授業にて篆籀を学ぶ。卒業後、東儀博、東儀博昭両氏に師事し、一層の研さんをつむ。八四年より国立劇場雅楽公演その他に出演。



三木 稔

一九三〇年、徳島市に生れる。東京芸大作曲科卒。池内友次郎、伊福部昭に師事。

一九六四年、同志と日本音楽集団創立。

その邦楽器群への作品に「古代舞曲によるパラフレーズ」、「凸々巨火」、「ダンス・コンセルタント」、「火の踊り」などがあり、コロンビアの四枚組レコード・アルバム「日本音楽集団による三木稔の音楽」(一九七〇)は芸術祭大賞受賞。

一九六九年、野坂恵子に協力して開発した二十絃箏のための「天如竜田の曲」、「筝譯詩集」など、作品があり、「野坂恵子・三木稔／二十絃箏の世界」(一九七九)が芸術祭優秀賞受賞。

一九七五年には最初のオペラ「春琴抄」を作曲、七九年へあだ、そして今年六月には「じようるり」をセントリースで初演して来たばかりである。その他ミュージカル・合唱・器楽などの作品群・映画・テレビ・舞台演劇における作曲も多数手がけている。オーケストラ作品の中でも一九八一年、ゲヴァントハウス・オーケストラ二百年記念委嘱初演の「急の曲」(Symphony for Two Worlds)によつて、邦楽器とオーケストラを結ぶ「鳳凰三連」(序の曲・破の曲・急の曲)を完成させたことの意義は大きい。

八四年末日本音楽集団を退団(団友)。後半生の作曲活動を期して新たな摸索を始めている。

について、邦楽器+弦楽四重奏+打楽器の編成が邦楽器のみに改められ、再作曲されて、ダンス・コンセルタントシリーズの四曲目として生まれかわりました。一九八六年六月の、北日本公演で初演され、今回は東京での初演となります。西洋文明も日本文明も同じように、大らかに受け入れてしまふ自由の大地、という北海道に対する作曲者のイメージと、西洋音楽、日本音楽といつた枠組に拘らず、常に自身の言葉で音楽を語ろうとして来た作曲者の信念が結びついて、開かれた音楽が完成したというこことです。

次の六曲から構成されています。

一、夜明け——凍てつくような大地に朝日が差し込み、辺り一面にもやが立ち籠める情景。自然が目を覚まし、北国の一日起まる。

二、ユリの踊り——生き物が活動し始める。まずは可憐なユリの花。

三、虫たちの踊り——統いて可愛い虫たちも賑やかに動き出す。

四、精靈の舞——大自然に宿る精靈(人間の営みの結晶であろうか)が、優美に高潔に舞を舞う。

五、おどけ——一転して人間社会に目を向ける。作曲者の故郷徳島の阿波踊りにも通じるスケルツォ。

六、大地に舞う——北海道の厳しい大自然と、そこで生活する生きとし生けるものへの讃美歌がいきいきと歌われ大団圓へ。

聴き手は、この六曲の流れに、自分なりのストーリーを自由に追うことができます。今回は、集団の最若手フレッシュメンバーを起用した大編成で、作曲者自らの指揮によつて大らかな大地の歌をうたいあげます。

古代舞曲によるパラフレーズ

一九六六年十月、第四回定期演奏会で初演され、集団の十八番の一つとなつています。作曲者にとって、抽象形式による初めての日本楽器のみの大合奏曲でありながら、伝統的な約束事に捉われない自由な表現手段をもつて、西洋のオーケストラには絶対に真似のできない邦楽器アンサンブルの新しい魅力を確立した記念すべき作品です。江戸時代の閉鎖的社会の中で完成された形のまま現代を生き続ける近世邦楽の伝統を一旦打ち破り、原点に立ち返る為に、作曲者の目は、音の上では伝承の外にある日本民族の青年期「古代」に向けられました。いわゆる日本情緒といわれる静寂の世界ではなく、古代人の生命力溢れる解放的な動的の世界にこそ、現代を生きる私たちが取り戻さなくてはならない音樂性が求められる——という作曲者の信念が見事に結実しました。

全体は次の五曲からなっています。

一、前奏曲——続く四曲を集約しつつ、これから起ころる何事かを予告、暗示。

二、相聞——万葉の恋の歌。それも、かなりなまめかしく。

三、田舞——豊作祈願の為の農耕行事の芸能。現在、民族芸能として各地に残る田舞のルーツか。スケルツォ風。

四、詠歌——葬祭の歌。むせるような慟哭。古代人の魂の叫びであろうか。

五、唄歌——歌垣とも書く。男女の群集歌舞で、恋愛、求婚が行われた。体の奥底に眠っていた民族の血のようなものが呼び醒まされるようだ。祭りは絶頂に達したあと、遠くへと去つて行く。

初演當時、多くの人々がこの曲の「新しさ」に驚き、興奮したということですが、十九年経つた今でも、その「新しさ」はかわっていなかった筈です。(田中悠美子)

一九七八年の秋、我々日本音楽集団の先乗り組八名は東独の古都ライプツィヒでのコンサートを迎えるとしていました。(この年の海外公演は過去の旅行の中では最大のものであり、約二ヶ月間に及び地球を一周する様な形で行なわれました。本隊約二十余名との合流に先駆けて少人数により数公演を行ないました。会場は市の中央広場に面した旧市庁舎の二階の大広間だったのですが、その時その場の雰囲気は今でもはつきりと覚えています。我々が演奏に入る前から、何か、とても暖かく且つ熱く、そして大変にデリケートな音楽そのものが聴衆から感じられていました。これはそれ以前には経験をした事の無いものでした。そしてライプツィヒ初公演は無事に終わり、度々のカーテンコールの後にステージの片付けに会場へ再び出て行った時、先刻から客席の一一番前に座っていた大層恵幅が良く優しい目をした聴衆の一人とその傍に微笑ましく同席していた東洋の出身と思われる女性が私の側へ来て言葉を掛けられました。この方達がライプツィヒ・ゲヴァントハウス・オーケストラのカペルマイスター、クルト・マズア氏と夫人で声楽家の、桜井偕子さんであつた事は言うまでもありません。またこれが私達日本音楽集団とこの御二方との最初の出逢いでもあった訳です。翌日メンバーはマズア氏の私邸に御招待されて、名ホストのマズアさんと名ホーススの偕子さんお二人のそれは熱いおもてなしを受け、一緒にプールで泳ぎ、卓球に興じ、御自身の演奏によるレコードを聴かせて頂き、日の傾くまで楽しいガーデンパーティーの一時を過ごさせて頂きました。今から七年前の事でした。



●偕子(中央)、クルト・マズア(右)夫妻と集団のメンバーたち。ゲヴァントハウスのレストランにて。

そしてその二週間後、他の国を廻って再びライプツィヒに戻った時のレセプションの会場で、三木稔氏はクルト・マズア氏御本人から口頭でゲヴァントハウス・オーケストラ二百周年の為の委嘱作品を依頼されました。その三年後の一九八一年の秋、この曲「急の曲」の世界初演は新たに落成したコンサートホールの柿落しとして実現しました。この折のドイツ滞在中も偕子さんは常に私達日本音楽集団とクルト・マズア氏との間の重要なパイプ役としての役割を果して下さいました。そして遂に昨年一九八四年の秋、声楽家、桜井偕子さんと日本音楽集団とのお付き合いが始まりました。それはベルリン音楽祭の一環として行なわれる私達のコンサートで演奏される三木稔作曲「古代舞曲によるパラフレーズ」の為のソプラノのゲストとして偕子さんをお迎えする事が出来たからです。それに先駆けて、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス・オーケストラ定期演奏会で「急の曲」が再演される同じ日の午前中、同コンサートホテルの内部の小ホールに於てリハーサルが行なわれました。そこで初めて偕子さんの音楽を聴いた時、作曲者のみならず私達團員一人一人が感じた思いは同じでした。この声こそ私達がずっと想い待っていた声だ、と。

此の度の総合定期演奏会では再び桜井偕子さんをソプラノのゲストとしてお迎えする事が出来、日本音楽集団にとつてはまたと無いチャンスに恵まれました。あのベルリンのコミッシュ・オペーでの演奏を日本で再現出来る事に私達は深い喜びを覚えています。

アル・バス席から

今日は日本音楽集団の東京のファンの方々の前で、私ははじめて指揮をする姿をお見せすることになり、ナーヴアスというか、大変緊張しています。服装一つにしても当日まで頭を悩ますことがあります。四年前に「あだ」のアメリカ初演を指揮した折に一枚をはたいて作った燕尾があり、それを着込んで出演したらどういうことになるかと考えたり、やはり着物かなと思い直したりするのですが、自分に合ったカジュアルな軽装でやりたいのが本音です。『ダンス・コンセルタント』のシリーズはそんな心構えで書いたのですから……。この『北の詩』は、北海道の文明開花をおおらかに讃美した作品で、日本の樂器の特別な味合いは生かしたつもりはあるものの他の幾つかの作品のように日本の伝統に立ち向うという決意をあらわにしたものではありません。例えていうならば、日本人の体格に合わせた洋服のようなものでしょか、何といったって皆さんは洋服姿で日常生活をしていらっしゃるのです。但し、もしも私が着物姿で舞台に出てきたら、奴のせっかくのチャンスだから、自分が昔い張つていたことに従つたのだと理解して下さい。それはどういうことかといいますと、戦国の武将にならつて床几に腰掛けた姿で指揮をするのが日本の伝統ではなかろうか、その方が伏せて弾く箏などの目線の位置からつて邦樂器の合奏に合理的だし、洋樂が作つた指揮者の猿真似ではない集団様式が作れるではないか、という持論です。『凸』の演奏会初演の折に、太鼓を打ちながら田村さんに実行してもらつたのが最



●くじょうるり打合せ中の、左から演出のコリン・グレアム、指揮のジョセフ・レシニヨ、そして三木。

初でした。勿論着物姿が似合う様式です。ところで、こんなハタ迷惑な曲書きに自作を振らしてくれるなんて、古い仲間とは暖かいんだなあ、としみじみ思っています。今後とも、自分の力の及ぶかぎり集団やこの音楽運動に貢献せねばと心に刻みつけています。今回は、指揮だけでなく、この一年間のこととプログラムに書けといつてくれます。それに甘えて、集団メンバーが関与してくれたものを報告しましょう。

一昨年の九月から今年の三月までの一年半、自分の大半の時間をかけて作曲した三つ目のオペラ『くじょうるり』(台本演出:コリン・グレアム)は、五月から六月にかけてセントルイス・オペラ劇場で無事世界初演されました。『あだ』に続き英語での二つ目のオペラであり、前作での強いイメージのため英米のオペラ界では期待というか注目というか、逆に少しでも悪ければ批判にさらされるという、わくわくするような厳しい環境の中で生れた新曲です。ロッシャーのヘセヴィラの理髪師、モーツアルトの『イドメネオ』、そして定評あるアメリカ人の新作『森の人々』と並んでのフェスティバル形式の競演で、他の演目のスタッフ・キャストとの間にも、どれが当りを取るかとビーンと張りつめた空気のあることがよく分りました。私はそういうのが好きです。

彼らとは同じホテルに住み、合宿のような稽古を一ヶ月フルにやつて、いよいよ五月三十日に、『くじょうるり』の初日です。『あだ』でもなかつた

三木 稔

ことですが、音楽や舞台上の所作は止めずに進むのに、いくつかのアリアのあと、初演にも拘らず（ア）沢山の拍手がきました。自分の感想よりも、米英で最も信頼度が高いオペラ評論家アンドリュー・ボーラー氏の評を引用させて下さい。アメリカの知性を代表し、常々厳しいことで有名なニューヨーカー誌及びロンドンのファインシヤル・タイムズ紙に書かれたもので、私にはとても嬉しいリヴィューでした。

――全てのクロス・カルチュアの作曲家中で、三木は個性的で、しかも高度に表現力をもつた音楽言語をもつて、日本と西洋の要素を、おそらく最も成功裡に結びつけた作曲家である。（じょうるり）の音楽は、その繊細さにおいて、並の表現でないという点において、感動的な音色の配合において、柔軟なリズムと運びにおいて、さらにまた感動的な旋律線において特筆すべきである。

上演はブリリアントであった。聴衆は魅了され尽したようだ、最後の瞬間、深い感動の表現である静寂が生まれ、それは次第にブランボーに、そして長いスタンディング・オベーションに移つて行った。

集団から参加した尺八・坂田誠山、二十絃箏・吉村七重、太棹・田中悠美子の三人は大活躍でした。

沢山の批評の殆んどが、あるいは名指して、あるいは楽器名をあげて賞揚し、「魔術的なインパクトを与えた」とか「対称的な日本の楽器と西洋オーケストラの色彩の巧みな配合」という風に感動してくれています。勿論、反対意見もあり、邦楽器については「邦楽と洋楽の素材が手に負えないほど異質だ」と書いた人もいました。これは日本でもよくあつた意見ですが、次第にそういう人が少なくなってきたことは皆さんもよく御存知でしょう。極めて露骨に作曲者を攻撃した地元紙もあり、インタークナルな有力紙の好評が入手されるまで一週間ほど、私はまことに居づらい毎日を過しました。

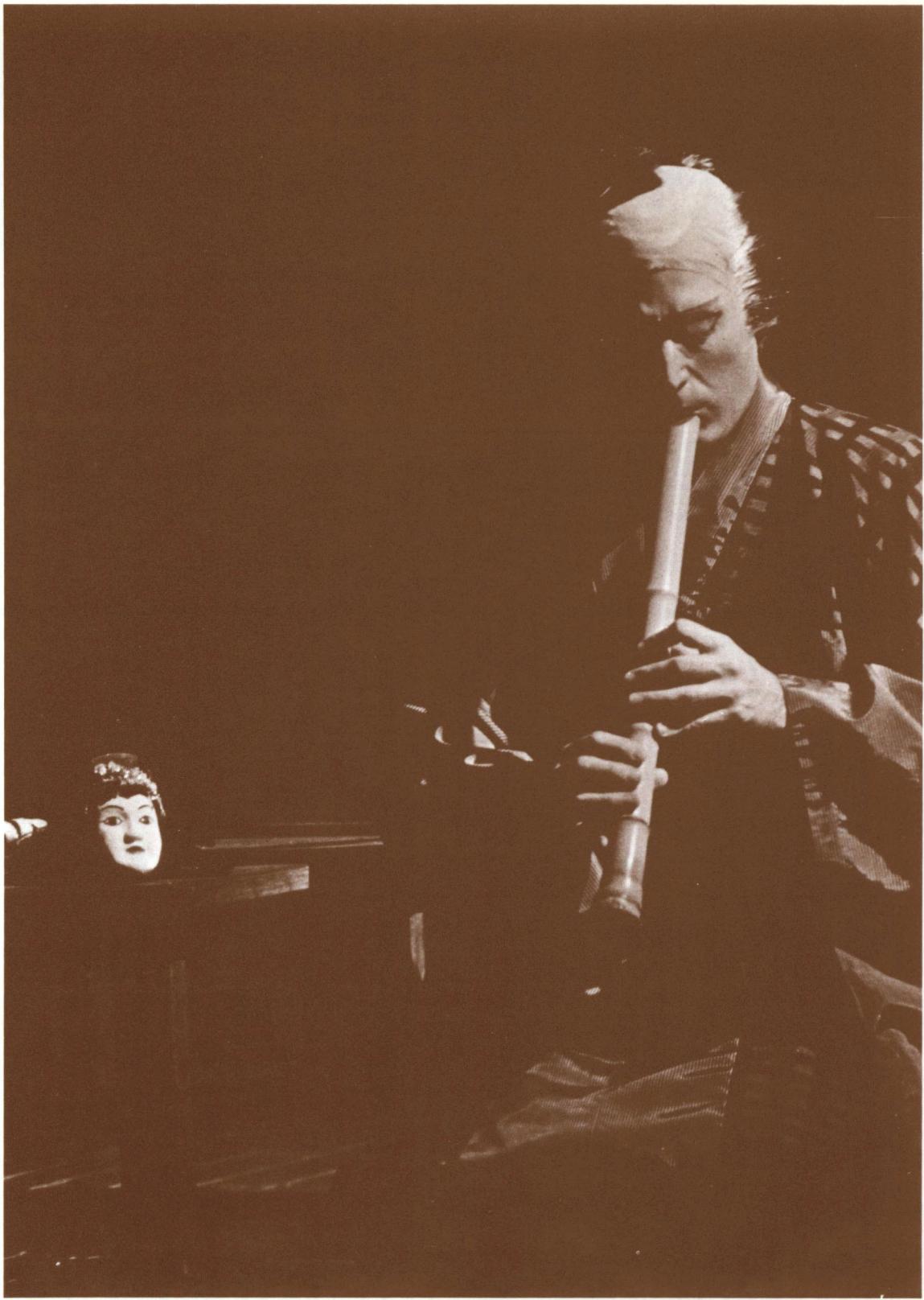
演奏した三人も膚で感じているように、へじょうりは画期的だったかもしれません。すでに幾つかの上演計画がはかられているのもその証明ですが、聴衆の熱狂や、なかでも競争相手の他のチームのスタッフ・キャストが自分で切符を買い求めて、何度も、中には全部の公演を聞きつづけた人がいるほどこのオペラを愛してくれたのには、こちらが感動してしまいました。でも、おかげで「日本初演は自分たちが行つてやるまで他の人はまかりならぬ」といわれ、折角日本語版を同時進行で完成させ、日本のオペラ団が来年やりたいといつてくれるのに頭が痛いことです。

このオペラの序曲、第二幕への前奏曲、第三幕の間奏曲を合わせると私の筝協奏曲第五番になります。中でも第三幕の間奏曲は「天国への歩み」として各紙の強い支持を得、沢山の人が涙したようです。尺八の旋律は集めると一つのまとまった独奏曲が出来るでしょう。太棹は三つの劇中劇に使っており、歌い手と二人で単独の語りものとして上演できるかもしれません。ともかくも、熱い仕事で前半生を打ち上げることができてホッとしていますが、二十年にわたる集団との運動がこのような結果に導いてくれたことを心から感謝しています。

後半生に移るブリッジのような形で八月一日・二日にミニ・オペラ（花園にて）の初演がありました。今年の「反核・日本の音楽家たち」の重要な公演で、勿論音楽家全てボランティアですが、四十周年の今年に合わせ、昨年暮に私が着想しプロデューサーとして行動し、いざみたく・小室等・中村八大・林光・間宮芳生たちとのオムニバス・オペラ・メッセージ'85の一曲として作曲しました。セントルイスの初日を終えて作曲をはじめ、帰国後完成したものです。日本人・朝鮮人・米捕虜の三被爆者が天国で夫々の民族楽器を楽しむうちに互いの加害・被害問題で口論になる。そこに更に

原爆飛行士が冥界入りして、花園は毒に覆われる。彼らに出口はあるのか、というプロットを決めて、ふじたあさやに台本を書いてもらいました。四人の優れた歌手のほか、日本の笛、朝鮮の伽倻琴、アメリカの打楽器（ヴァイブとドラム）という編成で、集団の西川浩平・田村拓男の両氏が真摯に参加してくれました。テキストを伴い、具体的な問題提起までしたのは今回が初めてですが、反核の声は若しかしたら氣の遠くなるような未来まで続けなければならず、今後共、沢山の方々に目を向けて頂けることを切望します。

セントルイス滞在中、オペラとは別に三人の邦楽器奏者大活躍の場面がありました。あそこには全米一の日本庭園を含む大植物園があり、そこのシェーンベルク・オーディトリウムという新しい立派なホールを中心にして、毎年六月日本祭が行われます。今年はオペラ劇場提供の三邦楽器奏者が二夜にわたってイヴェントの目玉になつたわけです。坂田・吉村・田中各奏者のソロも素晴らしい出来でしたが、私も第二夜に新しいレパートリーを提供しました。セントルイス交響楽団は、オペラ同様全米の二番人気で、そこには五人の日本人が二年来頑張っています。その人たちと、渡米する三人でできる作品を、と数年来考えていたのですが、今春たまたま岩波映画が小原流生花九十年記念映画を作り、その作曲を私が担当した折がありました。その「水色花舞」という映画の劇中音楽の一部を始めから組曲として使えるように想定して作曲し、尺八・二十絃箏・太棹・ハープ・弦楽四重奏による《Flowers and Water》と名付けた六曲からなる八重奏曲が出来たのです。（結Ⅲ）といふ事になります。そして私が指揮して六月十六日に舞台初演と相成ったのです。映画と共に用でしめたので、作曲者としては何となく恥かしい上演だったので、本番は仲々うまくいき、殆んどだつたのですが、本番は仲々うまくいき、殆んど



●くじょうるりで阿波少掾となって劇中で尺八を吹くポーズのアンドリュー・ヴェンツェル。

上ったのは、照れくさいがびっくりするような出来事でした。スタンディング・オベイションは日本では殆んどありません。アメリカでも通常の出来のオペラやコンサートでは仲々お目にかかるないのだそうです。『じょうるり』の三夜目の終演後、森の人々の作曲家ステファン・ポウラス夫妻から「こんなことは稀なことで、作曲者として誇るべきだ」と祝福され、そんなものかと思ったのですが、その数日後に臨席した森の人々の初日に立ったのは、知り合いとおぼしい女性たつた一人だけだったし、グラボーもとばないので、成程これが普通なのかと驚いたものです。

聴衆の対応で忘れないのは、集団の第十三次海外公演であった昨秋のヨーロッパ公演です。

旅の一一番最後がヘルシンキ・フィルとの『急の曲』、その前がシャウシュピール・ハウスでのゲヴァントハウストとのやはり『急の曲』でしたが、単独公演の最後としてはベルリンの由緒あるコミッシュ・オペーの『巨火』です。あの二十五分間の地鳴りのような拍手・足踏み・グラボーの中のアンコールを体験したいために、危険を冒して十数年頑張ったようなものなので、幸せい身を震わせました。

その前日には桜井偕子さんと共に『ペラフレーズ』がありました。この好演が次の日の導火線となつたのです。私は思わず十三年前の集団の処女海外公演を想起しました。一九七二年西ベルリンの音楽祭で『ペラフレーズ』を歌つた増田睦実さんは、新聞で「いつの日かベルリンのオペラに迎えたい」と書かれましたが、彼女はオペラを歌うことはありませんでした。日本の現代音楽史上最高のソプラノであった増田さんを想わせた桜井偕子さんは、東独のオペラ劇場でデビューを終え、

前途洋々の声楽家として今日私たちの前に姿を見せてくれます。日本でも今後大いに活躍の場を拓げられるに違いありません。

今年の夏から秋にかけて、久し振りに日本に居付いて『春琴抄』の五演目とボーカル・スコア出版作業に没頭しました。今はアメリカのミルクル・トリオから依頼されたピアノ三重奏曲を書いています。このあと、牧阿佐美バレエ団のために二時間のオーケストラを一年半かけて書く仕事が待っています。自宅で夏を過していく何としても落着きませんでした。どうしてだろうと考えて思ひ至つたのは集団の夏のアカデミーがないことでした。夏というのはどこかに行つて祭りをやつていないとおもしろくないですね。

ところで、かつて私は、憶面もなく『音樂は青春と同義語だ』と言つていましたが、今は周囲が変つたのか、私がアナクロなのか、青春などという言葉が恥かしいような醒めた世の中を見るのが怖い思いです。その中に埋め込まれるのはもうと怖い。私は、書生時代そのままに風雲を背負つて、一から後半生を生き直そうと思います。そういう自分が点火するまでの間、勝手な稽古に付合つてくれた今日の出演者の皆さん、本当にありがとうございました。プロ野球でも、ベンチから声の出ないチームは優勝しないといいます。互いに声援し合い、智恵を出し合い、この音樂領域のチャンピオンにふさわしい集団に育つて下さい。

私は二十年間に燃焼し盡し、油がすり切れたような形で昨年一杯で引退させて頂いたのですが、引退だ、それカットアウトだ、とは仲々いかなくて、この一年間、長い長いディミニュエンドを強制しながら、その間やはり集団節を歌つていて下さい。

そして、三十周年の記念フェスティバルを、小コンサートのできる自前の練習場を中心祝う日に臨席できることを、百パーセントの可能性を信

うに思います。かつての習慣が消えず、作曲の合間にメモした集団への想いの一部を記して(運営にたずさわる人々には勝手で申し訳ないですが)応援席からの熱い声とさせて下さい。

★夏期アカデミーを復活し、樂器毎の各地での講習会も開設する。★ソリストであると自認する人は別として、若年層中心に厳格な合奏團を団内に確立する。★全てのコンサートの前(開演三十分钟)に十分間の樂器紹介をする。★集団活動や各樂器のボリシー、広い情報、自由な評論をもつた機関紙『邦樂現代』を再開し、ここで私が書いているような外部の提言も載せる。同時に集団の出版部を確立、コピーを整理して樂譜販売を定着させる。★事務局嘱託制度を至急行い、団外のフリーのマネージャーの力を統合し、仕事量を現在の三倍以上に増大させる。それによつて少くとも合奏團員の生活が保証されるようになります。

★全員が奮起して民間スポンサーの開発にあたる。★総合定期でのソリストは一切年功を廃し、全員の判定によるオーディション制度で決定する。全員が演じ、判定するオーディションの数日を名物として公開する。★現行の三小委員会のメンバーは年毎に移動自由とする。各グループに音楽監督を置き、それぞれの独自の発想を生かし、各グループ主催の小定期や他の年間活動でおらかな競合をする。★団外の指揮者・ソリスト登用を活性化する。★中高校生対象のコンクールを主催し、活性化をはかる。★気迫が外部に伝わる企画を連発する。

箏

二十絃箏

箏を愛するすべての人の繊細な感情を忠実に音に表現するため、楽器の本質を追求した箏



オリジナル立奏台

日本音楽集団推薦

琴光堂和樂器店

東京都目黒区碑文谷2-19-15 TEL (792)8481

露秋銘 尺八

西 田 露 秋

〒794 今治市新谷新田甲798
電話 0898-48-1097・1257

日本の音、その磨きぬかれたひびき



銘木尺八



コチョウ



新発売!!

完全正律管

◇みやた尺八 (宮田耕八朗監修)

1.2尺~2.3尺管 5孔~7孔

参考価格 楓材 1.6尺~1.8尺
¥19,500

◇みさと尺八 (山川直春監修)

女性向天然白色

1.2尺~2.3尺管
参考価格 1.6尺~1.8尺

楓材 ¥19,500
合竹材 ¥39,000



木管高級

しの笛 (ドレミ調)

◇みさと笛 (ウラ穴有)

F (一本調子)~E (十二本調子)

参考価格 楓材 C~B ¥ 9,000

合竹材 C~B ¥13,500

山川直春監修

◇蝴蝶笛 (ウラ穴無し)



○尺八のことなら全て揃う専門店です。

○通信販売も行っておりますのでカタログ御希望の方は無料進呈致します

○尺八の事なら何でも御相談に応じます。(尺八蝴蝶の店)

新製品につきましては、御迷惑のない様
製作に全力を傾けて居りますが、お待ち
いただかねばならない品もありますので
何卒御了承下さい。

誠 和 銘 尺 八

完全分業化等、近代的技術革新により、品質のバラつきを少なくし
コストダウンに成功。

普及管から中級高級管まで、各方面から高い評価を得ております。

誠和音芸

代表 坂田 誠山

〒156 東京都世田谷区桜3-18-18 TEL 03-420-0483

創業・昭和8年

お琴・三味線の琴栄

●東海一の実績を誇る店



◆1階・店舗

- △三味線、尺八、舞扇 多数陳列
- △お琴、三味線、尺八の付属品、楽譜 多数取揃えてあります。

◆2階・お琴展示場(ミニ舞台付)

- △お琴、弦目琴、20弦琴、17弦琴と豊富に取揃えてあります。
- △ミニ舞台でお琴を弾いて下さい。

〈お買い求め〉 クレジット販売をご利用下さいませ。(最高36回払)
〈ハンフレット〉 無料送付致します。



御琴・三味線専門
琴栄楽器店
代表・増田康壽
〒500 岐阜市司町九(大学病院前)
TEL <0582> 1826代



なぜか、
いい予感。

安田火災の積立女性保険
「マイセルフ」新発売

プライバシーを包んで
お運びします。

どうぞ、お気軽にご相談下さい。

- 演奏旅行に出るが、楽器類の輸送は?
- 地方公演の際、舞台装置などの輸送は?
- 招待する外人団体客のバゲージの取扱いは?

ダイホー何でも相談室

□東京(03) 743-3252

□大阪(06) 327-5611

 **大宝運輸株式会社**

本社 大阪市東淀川区南江口3-4-48

〒533 Tel.06-327-5611代

東京 東京都太田区西糀谷4-12-2

〒144 Tel.03-743-3252代

安心は、ワイドに
ワールドに。

- ※ 損害保険の安田火災はあなたの暮らしをワイドに補償致します。
- ※ あなたの保険設計は明和損害保険企画におまかせ下さい。



日本音楽集団指定損害保険代理店

明和損害保険企画

RM 小笠原 明男 オフィス ☎ 937-0547
安田火災海上保険株板橋支社 ☎ 962-7311

第一印象、大切に。

初めての邦楽器。初めての体験。
どんな印象を持ったかな？



指揮者が腰かけた!?
びわの音ってへんなの！
木魚に大爆笑！



わかりやすい楽器解説

楽しい日本のメロディー、世界のメロディー。

心に残るオリジナル作品。

日本音楽集団学校公演

未来の文化を担う子どもたちのために

学校公演プロジェクトチーム

蘇る「祭り」

—サロンコンサートを聴いて—

茅島秀夫（後援会／ニッポンアメイツ世話人）

子どもの頃、祭りばやしを聞いた。

私の生まれたところは、山合いの小さなおよそ現代文化とはかけ離れた、「自然に恵まれた」村であった。

まあ、自然に恵まれた——というのは都会の発想で、住んでいる人々にとつては、あえてそんな事を感じることもなく、あたりまえの事のように日々を送っている。

夏のある日、私はいつもより早く風呂に入れられ、糊の利いた浴衣を着せられて母の炊いた赤飯を食べながら、今日は“夏祭り”的であるという事を教えられた。

家の外がすっかり暗くなつた頃、父に手を引かれて、近くにある星の宮神社に行つた。

近くまで行くと、人のざわめく声に混つて笛と太鼓の音が聞こえて來た。

鳥居をくぐり、裸電球のフィラメントの光の下を、夜店に並んだ銀玉鉄砲やブリキの戦車に目を魅かれながら、人混みを縫うように父と一緒に歩いた。

人混みを抜けると、社の横に舞台があり、紅白の幕の前で笛と太鼓の演奏が行なわれていた。

酒屋のおじさんや米屋のお兄さんが赤い顔をして結構真剣に笛を吹いたり、太鼓をたたいたりしている。

「秀ちゃんも吹いてみるけ?」、いつも私達が票を盛りにいつては追いかけられた「ゲンちゃん」と呼ばれている人だつた。私達はガンコのゲンちゃんと言つて恐がつっていた。ゲンちゃんは私に笛を渡しひこニコと笑つてゐる。

私が緊張していると父が「吹いてみろ」とこれも笑ひながら言う。汗で濡れた笛を口にあてて吹いてみた。音が出ない。何度もやつても音が出ない。穴があいてるだけだから音なんか出る筈がないと思ひ

つつまつ赤になつて吹く。ゲンちゃんが手をそえてくれて「そつと吹いてみろ」という。そつと吹く「ブフオー」という音がする。やつた!!

大人たちは「やつた、やつた」と手をたたいている。ゲンちゃんのごつつい手が私の頭をぐりぐりと撫でて「こりやあ筋がいいや」と誉めてくれた。

また音が流れ出した。ゲンちゃんの笛は、ピッピッと威勢がいい。私がお祭りを見たのも、笛を吹いたのもそれが初めてだつた。父も近所の人も楽しそうで、私はとてもうれしかつたのを覚えてゐる。

今、地域という言葉がよく使われているが、私にとつて幼いながら、あの時感じた得も言わぬ気持ちが地域という言葉のベースになつてゐる気がする。祭りは数年続き、私が中学に入る頃はすでになくなつてゐた。

そして、あの村祭りから二五年。原宿のアコスタジオで音楽集団の演奏を聴いて、すごく懐しい気持ちになつた。私にとつての“地域”がそこにあつた。大きなホールでの演奏会もいい。しかし私はどちらかと言えばサロンコンサートのような和気あいあいとした雰囲気の中での音楽が好きだ。笛の音が細い糸のように流れ出す、琴の音が優しい波になつて体を包む、緊張した、それでいて安らぎのある瞬間。音が止むと賑やかな笑いが空間を埋める。

祭り」というと失礼かもしれないが、レコードから流れる冷たい音としてしかとらえていかなかつた邦楽を、こんなに身近かに感じさせてくれた音楽集団。もつと集団の人達と話したい。そして、集団と私たち“メイツ”的地域をつくり出したい。そしてサロンコンサート等を通じて、多くの人々の心に埋もれてしまつてゐるであろう「祭り」を蘇らせたい。

山形学校公演に参加して

稻垣 隆史（劇団民芸）

東京ではすでに何回か公演し、レコードにもなった『八郎物語』の学校公演にお誘いをうけ、九月二十四日から二十九日までのおよそ一週間参加させて頂きました。山形では小学生、新庄では中学生を対象とした七ステージ、民芸の学校公演では、対象が高校生だけでしたので、一体どんな反応が返ってくるのか、ちょっぴり、不安でしたが一回目のステージで雲散霧消……。演奏者へのインタビューを兼ねた楽器紹介のコーナーでは、宮田、福田さんの尺八の豊かなボリュームに生徒たちは驚きの目をみはり、西川さんの『のうかん』によるお化け出現の音に大喜び。野口さんの三味線にきて、ようやく『アアッこれは知ってるう』……。

半田さんのびわの弾き語りになると『へエーツこんなのは始めてだあ』といつた風で、実に生き生きと反応して可愛い。舞台の上から語りかけると、恥ずかしげに、下を向いて終う子。ニッコリ笑い返す子。『フン、お前なんか知らん』と言った顔でそっぽをむく子。それが又実に可愛い。芝居では味わえない客席との交流を存分に楽しませて貰いました。尾崎、黒坂さんの演奏する打楽器の珍しさにびっくりし、木魚の演奏で彈じける様に笑う子供達を見て、この公演に参加させていたいたいと喜びを感じた次第でした。花房、滝田、島崎さんの弾かれる琴、十七絃、二十一絃の糸の本数当てクイズでは『十本』『十九本』等と凄い反応……。正解を知り、『あたつたあー』と椅子から飛びあがる子供達みて、ふつと、若しこれが『ピアノのキイの数は?』『ギターの弦は?』だったとしたらどうであろうか?と考へて暗澹たる思いがいたしました。こんなに目を輝かせて聴き入っている子供達から伝統音楽を奪つたものは、何なのかな?花笠音頭で手拍子を打ち、かけ声まで飛出して喜ぶ子供達をみて何とも複雑な心境でした。西の彼方には『東は東』と言う言葉があるのに、『西は所詮西』と言う発想の無い国民性の違いにいるものか、はたまた、未だに『ピアノのキイをポンとたたきや、文明開化の音がするう』が続い

ている故か?

閑話休題。

今回の旅で非常に印象深かったのは、集団の方々が実際に練習なさるという事でした。ホテルの各部屋から聞こえて来る様々な楽器の音色に聞き入りながら、己れの不勉強を深くはじた次第でした。それと、お互い同士で交す、率直な意見の交換……。同じ方向を向いて歩む人々の理想的な像をそこに見て感動しました。考へてみれば、何処の国に『この国の音楽をもつと広めよう!』等と言う運動があるでしょうか?宝塚の故天津乙女さんが踊る『鏡獅子』をオーケストラに編曲なさつた先人の苦心にこそ文化勲章を与えられるべきです。SKDの『東京おどりは——ヨーヤ、サアー!』を馬鹿にしてはいけません。どうも近頃腹一杯楽しめるもんは、ハイブロードやしない、みたいな風潮がある様な気がします。馬鹿ばかしい……。畏まつて聴かなきやならない音楽等ある筈が無いと、思い知るべきでしよう。人をひきつけるすばらしい『個性』が、そんな得体の知れぬ冠みたいなものに惑わされてちっぽけな世界をただウロチヨロしている様なものに、ある訳がありません。そこに有るのは、マンネリと一人よがりだけです。

さて、楽しい旅が終つて四日ばかりたつたある日、三味線の野口さんから写真が送られて来ました。帰りの車中……。はなちようちんこそ出してはいなかつたものの、ぐつたりと眠りこけている小生の後で半田さん達がVサインをして、『どうオ?これ、家の眠り猫よオ』といった構図……。何時か又御一緒する機会があつたら、必ず、カメラ、テープを駆使して素晴らしい作品を持げさせて聞く事を固く誓つた次第でした。その為にも、どうぞ又お誘いくださいます様、期待しておる次第であります。



●稻垣氏(左端)と集団メンバー、新庄市民文化会館にて。

美恵子の二味線みてある記

—長崎、五島の学校を巡つて—

野口美恵子

七月七日の午後羽田を発ち、約二時間後に私達一行は長崎空港へ着いた。

長崎の気候は、海風や湿気のようすがある程度想像できたものの、梅雨の中、船で五島を往き来する演奏の旅とあって、三味線の皮が破けずもつだらうかと懸念されるほど、予想以上に湿度が高かった。出島の宿舎で先に着いていたメンバーと合流。中華料理を食べ、銀嶺でお茶を飲みながらギヤマンや西洋骨董に目を奪われてその日は終わつた。

翌八日、朝八時出発。時津中学校で第一回目の公演。そして午後は時津盲学校。皆、染み入るように聴いてくれた。ここでテレビ局の取材あり。終了後、急ぎしたくをして長崎港を発ち、福江島に向けて三時間半の船旅。船中、盲学校公演のテレビニュースを見る。

さて翌九日。一ヶ月前に完成したばかりの福江勤労福祉会館で、福江中学校公演。ロビーにはチャンココ踊りの大壁画。天井からは極彩色の五島バラモン（大鳳）が下がり、窓外は石田城跡の石垣が連なる美しい会場だつた。昨夜会場入りした時セットされていた松羽目も、反響板に変更ずみ。その反響板もこの日が初めての使用だそうだ。ここではNHK長崎の取材あり。客席には一般の人も数多く混り、熱心に聴いてくれた。鳴りやまぬ拍手に「コンドルは飛んで行く」をアンコール演奏し、客席の手拍子と一緒に盛り上がる。昼食後、井持ケ浦ルルドの泉を見学。十字架をのせた墓石や、複雑な入り江を見ながら次の公演地、玉の浦中学校へ向かう。この中学校は奥地のため、地域の小さな会館で公演。私達はステージを使わず、客席へ下りてセッティングをし、父兄やおまわりさんも一緒に聞く中で演奏した。「音楽つていいな」と、ふと呟く子供。それを聞いて胸が熱くなつたと語るわが事務局長。心の触れ合いを感じるひとときだつた。

翌十日朝八時、出発前にきのう福社会館で取材されたNHKテレビニュースを見る。宿舎の人や泊り客、そして港でも「テレビに出とつた人でしょ」と声をかけられる。福江港から一時間で奈留島へ。ここでも生の演奏は初めてとか。奈留中学生もよく聴いてくれた。公演が終わると

また船で移動。一時間で中通島の奈良尾港へ。午後の奈良尾中学校で五島最後の公演を終え、一日のうちで、二回の船の移動にもめげず、皆元気で宿舎に着いた。

翌十一日は有川港から一時間半かけて長崎に戻り、佐世保へ。波佐見中学校公演は、地元出身の経済界の名士の葬儀が学校の前で行われていたため、二時の開演まで音を出せず、ひつゝ、さはじまる。思いがけず皆楽しんで聴いてくれ、ホツとする。終了後、波佐見焼の陶芸の館へ見学。この日は私の誕生日。不意をつかれた誕生日祝いの豪華な晚餐に、私、いたく感激する。

翌十二日の午前中は、生徒数一、三八五名の日宇中学校公演。長崎放送の取材あり。以前音楽集団の事務局員だった牧山さんが、この地の人とあって、門下生と共に来聴される。午後の彼杵中学校公演を終え、今夜は最後の晩とあって、先ほどの長崎放送のニュースを見ながら、大きな伊勢海老や鯛を肴に打ち上げ。連日の、五島牛の肉や海の幸にも飽きず、皆満腹になつて歓談した。

翌十三日は久原養護学校。いよいよこの公演が最後と思いながら三味線を取り出すと、破けていた。やはり危惧していたことが現実になつた。急ぎ替え三味線をしたくする。演奏が始まると、興にのつた子供が立ち上がり、尺八や三味線の真似をしている。終了後も控え室まできて、去り難いようす。そして一言「おまえたち、うまいな」。飾り気のないこの講辞に、一同、胸うたれる思いがした。一週間十ステージの全行程を終え、長崎空港へ向う。

私は、誕生日にプレゼントされた波佐見焼のコーヒーカップと、破けた三味線と、純朴な人々の温かさをかかえ、午後二時三十分、同行の六名と共に長崎空港を発つた。



●福江港に向かうフェリーの中で。
Vサインをする美恵子さん(右から3人目)。

日本音楽集団及び団員等の今後の予定

- 12月13日(金) 竹の響き——三橋貴風尺八の世界 音楽の友ホール
- 1月5日(日) 日本楽器銀座店で新春コンサート
- 1月19日(日) 船橋市主催により日本音楽集団演奏会 船橋市民文化ホール
- 1月19日(日)～2月10日(月)
- アヴィニヨン現代日本音楽週間（仏）、ウィーン王室新春舞踏会
 (奥)、ケルン日本文化会館（西独）で三橋貴風・吉村七重がジ
 ョイント・コンサート
- 2月7日(金) 第92回定期演奏会 芝abc会館ホール
- 2月16日(日) 小山市の主催により日本音楽集団演奏会 小山市文化センター
- 3月16日(日) 千葉県茂原市で日本音楽集団演奏会
- 3月23日(日) サンフランシスコ領事館主催の現代日本音楽の夕べに半田淳子
 (琵琶)が出演、他にソロコンサートも予定
- 5月9日(金) 第93回定期演奏会 朝日生命ホール
- 5月10日(土) 中学生対象のヤング・ピープルス・コンサート 虎の門ホール
- 6月26日(木) 第94回定期演奏会 芝abc会館ホール



日本音楽集団1985年後半の主な活動記録

- 6月26日(水) 新潟県村上高校・新発田南高校鑑賞会
- 6月27日(木) 天童市中学校鑑賞会
- 7月4日(木) カワイ音楽教育シンポジウム関東大会の最終日にコンサート
- 7月6日(土) 辻堂小学校鑑賞会
- 7月8日(月)~13日(土)
長崎県（五島含む）巡回学校公演
- 7月11日(木) 「桜川」(田中友子作曲)NHK-FM放送録音。 7月31日 〈邦楽のひととき〉で放送
- 8月1日(木) 万博で「八郎物語」をくかかし座の影絵とともに生演奏で上演
- 8月3日(土) 反核コンサートで「板碑のうた」(長沢勝俊作曲)を日フィルと共に演。 田村拓男（指揮）、坂田誠山（独奏尺八）
- 9月9日(月)~14日(土)
秋田県巡回学校公演
- 9月15日(日) 名古屋で行われた第8回日本音楽合奏フェスティヴァルに出演
- 9月18日(水) 長沢勝俊作品集Vとして「大津絵幻想」「冬の一日」ほかをレコード録音。 11月1日発売
- 9月25日(水)~28日(土)
山形市小学校鑑賞会
- 9月26日(木) 第90回定期演奏会
- 9月27日(金) 越ヶ谷市平方中学校鑑賞会
- 9月30日(月) 新庄市中学校鑑賞会
- 10月8日(火) 栃木県大平町にて国際青年年にちなみ平和コンサート
- 10月14日(月)~15日(火)
鶴岡・酒田市周辺で学校公演
- 10月28日(月)~11月2日(土)
宮崎県定時制高校および分校巡回公演
- 10月28日(月) 横須賀市立大津中学校鑑賞会
- 10月29日(火) 川崎中央・東ライオンズクラブ主催により、昼は中学生のための、夜は市民のためのコンサート
- 11月3日(日) 羽生市の主催により日本音楽集団演奏会
- 11月4日(月) 文化庁芸術祭熊本公演で日本音楽集団による「日本の響」公演
- 11月5日(火)~6日(水)
西日本地方演奏会として、阿蘇一の宮および下益城城南公演
- 11月21日(木) 第11回関西定期演奏会
- 11月22日(金) 第5回サロンコンサート
西日本地方演奏会府中公演
- 11月23日(土) 同広島公演
- 11月25日(月) 同諫早公演
- 11月26日(火) 同川棚公演
- 11月27日(水) 同久留米公演
- 11月28日(木) 同九州公演
- 11月29日(金) 前橋高校鑑賞会
- 12月2日(月) 第91回定期演奏会
- 天童市民会館
伊東市観光会館
- 万博会場エキスポホール
日比谷公会堂
- 芸術創造センター
- 新座市民会館
- 山形市民会館
芝abc会館ホール
- 新庄市民文化会館
大平町体育館
- 横須賀市文化会館
川崎産業文化会館
- 羽生市産業文化ホール
熊本県立劇場
- 京都染織会館シルクホール
原宿アコスタディオ
府中市文化センター
エリザベト音大ホール
諫早文化会館大ホール
川棚町公会堂
文化センター共同ホール
福祉センター音楽ホール
- 朝日生命ホール

第八回日本音楽合奏フェスティバルを終えて

水野正徳（グループみづほ）

去る九月十五日、名古屋市芸術創造センターでは早朝より日本音楽合奏フェスティバルの準備で慌しかった。東京などから大勢の仲間を迎える、演奏を通じて交流を深めようという名古屋では初めての催しである。

すでに八回を数えるこの催しも当初は日本音楽集団を中心に友の会合奏団などを交えた楽しいお祭り的なものから出発し、第三回のときは日本音楽協会として組織された合奏団を中心に行なわれ、一つの方向づけがなされたのである。これからがスタートと思われたフェスティバルも、その後回を重ねるにつれややマンネリ化の方向にあつた。こんな中で“いすれ名古屋で開催してはどうか……”グループみづほの実力を考へると少々荷の重い提案ではあつたが、今後のフェスティバル発展のため何かお役に立てればと主催の責任を負うことになつた。

当初は開催を危ぶむむきもあつたが、計画が具体化してから“もうやるしかない”練習にも自ずと熱が入り、高校生も含め新人の意欲的な努力で今までにない盛り上りをみせ、準備にも全員の力がまとまり本番当日を迎えることができた。

さてリハーサル、続々と各合奏団のメンバーが会場入り。約一年半ぶりの顔合わせである。舞台での音出しはなごやかながらピーピンと緊張感が漂う。樂屋では調絃係が大奮闘。大編成、樂器も多種で転換もたいへん。かなりゆとりを持つたつもりの時間もあつといふ間に過ぎて結局十分遅れて幕あき。グループ



●最後の合同演奏で「ファンタスマゴリア」を演奏する音楽集団や各合奏団の面々。



●演奏中のグループみづほ(名古屋)。笛を奏するのが水野正徳氏。

みづほの「冬の一日・パート2」、たあくの「淨瑠璃寺」、そして名古屋のもう一つの団体、太鼓音曲研究会による「能登御陣乘太鼓」、星組合奏団は「青のモチーフによるコンポジション」と各団体の特色を生かした出し物であった。

後半ではまず日本音楽集団七名と地元の山田隆氏の語りによる「八郎物語」、さすが専門家の集まりである。メインイベントは出演者有志による合同演奏で「ファンタスマゴリア」第四回フェスティバル以来で今回もその第一弾。当日の一回だけの合わせにしてはまずまずの出来ばえ。先輩合奏団を相手にみづほの筝群もよく頑張ったようである。アンコールは出演者総勢六三名による「コンドルは飛んで行く」をみづほの熊沢辰巳の編曲・指揮で楽しく締めくくることができた。

連休でやや客足は少なかつたが、それでも二百数十名の方に私たちの精一杯の演奏でフェスティバルの意義を知つていただいたことは大きな収穫であった。

実行委員会として色々反省すべきこともあらが参加された皆さんのご協力で今回の催しが成功裡に終つたことを素直に喜び合いたい。また多忙のなかボランティア出演で盛り上げていたいたい日本音楽集団の皆さんに厚くお礼申し上げると同時に、今後とも私たちのよよりよきリーダーとして温いご指導を期待するものである。私たちもさらに精進してよりよい音楽を創っていくつもりである。



●最後に日本音楽集団や各合奏団入り混じって「ファンタスマゴリア」を合同演奏。

筦山銘尺八

琴古、都山各寸美麗仕上

特製品煤竹^{すす}も各寸揃います

木村筦山

〒379-16 群馬県利根郡水上町谷川437 TEL. 0278-72-4108

竜勝堂

手造り
琴・三味線 専門

附属品・琴糸・三絃皮張・貸琴

倉持楽器店

営業時間 午前9:30～午後6:30
日曜休日 土曜9:00迄

●先生をご紹介致します。

電話 (店) 0473-45-5807
0471-63-3864

クリ甲など、ならないお琴もなるよう修理出来ます。

- 三味線の事は――
- 日本で唯一人の総合――

三味線師

浜松屋 三味線店 ^

- 皮より棹まで手造り自家製造
- 張替は30～50%割引
- 技術最高、値段最低の店

東京都小金井市本町3-8-9(〒107)

☎0423-85-5319

お知らせ

●団員募集

団では此度団員を募集することにしました。以前の研究団員制度と違つて若干の特別訓練ですみやかに集団のレパートリーをこなせる力のある方を望みます。

募集楽器 箏(十七絃も弾ける人を歓迎)・琵琶・胡弓・打楽器各若干名
オーディション 一九八六年三月十七日(月)

締切日 一九八六年三月三日(月)

お問い合わせ 事務局まで(電話〇三一三七八一四七四一)

●団員動向

団員入退団

前回お知らせすべきことでしたが打楽器の細谷一郎が本年四月に入団、すでに定演や地方公演などで活動しています。彼は国立音大を卒業後、岡田知之打楽器合奏団などで活動していますが入団を契機に日本の伝統打楽器の修業も始めています。筝で活躍し、今後が期待されていた松本和美が結婚を機に主婦業に専念するため退団することになりました。

新譜紹介

●「大津絵幻想」がレコードになりました

「長沢勝俊作品集第五集」として、「冬の一日」「虹の輪」といった愛すべき作品も併せて収録されています。(定価二八〇〇円)
 このレコードについてのお問い合わせや、講入希望等は日本音楽サービス(三七八一四七四一)へ。

●長沢作品を扱ったテープと楽譜のご案内

家庭音楽会出版部から「長沢勝俊作品集」として、縦譜とカセットテープ(二巻)が発売されました。ざつと曲名をあげると、「飛驒によせる三つのバラード」「合奏曲・六段」「まゆだまのうた」「六連星」「合奏曲・千鳥」「二つの田園詩」「秋によせる三つの幻想曲」「箏三重奏曲」「箏のしらべ」*「春三題」*「箏協奏曲」*「雪三態」など。(＊は縦譜のみ)キラ星の如く並んだ名品ばかり、鑑賞にも勉強にも是非揃えて下さい。

●日本音楽サービス扱いのレコードと楽譜●

●出版楽譜

長沢勝俊作品

- 尺八・等による「萌春」／400円
- 箏四重奏曲／600円
- 詩曲・まゆだまのうた／650円
- 二つの田園詩／500円
- 楽しい練習曲集「箏と尺八」初級編／750円
- 楽しい練習曲集「箏と尺八」中級編／700円

三木稔作品

- 四群のための形影／500円
- 箏譚詩集I／300円
- 孤響・ソネットI／500円
- 天如・佐保の曲・竜田の曲／800円
- 夕影の詩・華双喜・雅びのうた／700円
- 松よ(パート譜は別)／900円*

- 千絵の曲／400円*
- 箏譚詩集II／1200円*
- 尺八のためのソネットII-V／1200円*
- 序の曲／2500円*
- 破の曲／2500円*
- 急の曲／4000円*

●レコード

- 大津絵幻想・冬の一日 長沢勝俊作品集——2800円 [新譜]
- 組曲「人形風土記」子供のための組曲 長沢勝俊作品集——2200円R
- 萌春 長沢勝俊作品集／二つの舞曲・箏四重奏曲・詩曲・萌春——2200円R
- まゆだまのうた 長沢勝俊作品集／三味線協奏曲・颶踏・二つの田園詩・まゆだまのうた——2200円R
- 錦木によせて 長沢勝俊作品集／春三題・尺八協奏曲・錦木によせて・飛驒によせる三つのバラード——2200円R
- めばえ 三木稔選集I／「四季」ダンス・コンセルタントI・芽生え・奔手・夕影の詩・竜田の曲——2500円CA
- 巨火・わ 三木稔選集II／巨火・わ——2500円CA
- 急の曲 三木稔選集III／急の曲——2800円CA
- 歌樂 ヘロ出しチョンマ・八郎物語 三木稔選集IV ヘロ出しチョンマ・八郎物語 2800円CA
- 野坂恵子・三木稔「二十絃箏の世界」/破の曲・春琴序曲と春驚鶯・白檀・まぼろしの米・天如・佐保・竜田・華譚詩集II・ひなぶり・東から——10000円CA
- 野坂恵子・二十絃箏の世界II／紡ぐ(池辺晋一郎)・芽生え(三木)・秋の曲(三木)・ワールズ(マカイ)・グリーン・スリーブス——2500円CA
- 野坂恵子・二十絃箏の世界III(三木稔選集III)／鎮魂協奏曲・華譚詩集I・華やぎ——2500円CA
- 三木稔作品集I／古代舞曲によるバラフレーズ・凸——2000円CO
- 三木稔作品集II／ソネット・華譚詩集I・四群のための形影——2000円CO
- 三木稔作品集III／序の曲・雅びのうた・天如・孤響——2000円CO ○三木稔：凸・古代舞曲によるバラフレーズ／1500円CO
- 雅(みやび)／華やぎ(三木稔)・六段の調・みだれ・新八千代獅子——2500円CO
- GAKU／樹冠(長沢)・四大(入野義朗)・嵐(藤田正典)・ブレイリュード(新実徳英)——2800円KO
- 野坂恵子古典舞曲集I-V／各2000円CO ○日本の楽器入門——3000円CO

★上記のレコード・楽譜の販売の仲介をしますのでご希望の方は下記の日本音楽サービスへご連絡下さい。

また、コピー楽譜もお預けしています。

★楽譜の価格の後、無印は全音版、*はみきねん・コレクション版、レコードの価格の後、RはRVC版、COはコロムビア版、Vはビクター版、GAはカマクラ版です。

★この他にカセットテープもあります。詳細はお問い合わせください。

日本音楽サービス

東京都渋谷区笹塚3-17-1 滝沢ビル302 電話03-378-4741

代 表	長沢 勝俊	太一 (打楽器)	尾崎 太一 (打楽器)	名営團員	山田 美喜子 (三味線)
副代表	坂田 誠山	藤崎 重康 (尺八・笛)	竹井 誠 (尺八・笛)	協力團員	山田 まゆ美 (琵琶)
運営委員長	奈良 義寛 (局長)	米澤 浩 (尺八)	桂地 慶司 (胡弓・作曲)	伊藤 惣一	佐藤 里美 (箏)
事務局	霜島 素子	半田 淳子 (琵琶)	野口 美恵子 (三味線)	地方在住團員	小林 恵美子 (箏) 休團中
監事	芹沢 英雄	太田 幸子 (三味線)	太田 幸子 (三味線)	塚本 早苗	内藤 久子 (箏)
マネージメント協力	株式会社 ジャパン・アーツ	加藤 洋 (三味線)	坂井 敏子 (箏・三味線・胡弓)	田嶋 直士 (尺八)	大畠 菜穂子 (箏)
正團員	望月 太八 (笛)	吉村 七重 (箏)	白根きぬ子 (箏) 在ロンドン	藤舍 成敏 (打楽器)	島崎 春美 (箏)
西川 浩平 (笛)	宮田 耕八郎 (尺八・笛)	花房はるえ (箏・三味線)	吉川 欣也 (尺八)	高橋 明邦 (打楽器・指揮)	佐藤 里美 (箏)
坂田 誠山 (尺八)	坂田 誠山 (尺八)	木村 玲子 (箏)	水谷 雅康 (尺八)	黒坂 升 (打楽器)	熊沢 栄利子 (箏)
三橋 貴風 (尺八)	小田切 清光 (笛)	内藤 洋子 (箏)	水川 寿也 (尺八)	細谷 一郎 (打楽器)	佐藤 由香里 (箏)
福田 輝久 (尺八)	鶴田 錦史 (笛)	滝田 美智子 (箏)	養田 司郎 (三味線)	田村 拓男 (指揮・打楽器)	内藤 恵美子 (箏) 休團中
滝沢 修	秋浜 悟史 (笛)	野口 鎮 (箏)	田中 悠美子 (三味線)	稻田 康 (指揮)	田嶋 直士 (尺八)
野坂 操寿	荒谷 俊治 (笛)	佐藤 敏直 (箏)	中島 隆 (樂器係)	長沢 勝俊 (作曲)	藤舍 成敏 (打楽器)
鶴田 錦史 (笛)	稻垣 隆史 (笛)	柳家 小三治 (箏)	田中 悠美子 (三味線)	内田とも子 (作曲)	高橋 明邦 (打楽器・指揮)
高瀬 卓郎	小田切 清光 (笛)	横山 勝也 (箏)	杜 菊恵 (胡弓)	坂井 敏子 (箏・三味線・胡弓)	黒坂 升 (打楽器)
霜島 邦子	鶴野 和子 (箏)	青柳 孝年 (箏)	山田 明美 (箏)	吉村 七重 (箏)	細谷 一郎 (打楽器)
半田 多真美	高野 文子 (箏)	赤木 朝吹 (箏)	寺島 孝之 (箏)	宮本 幸子 (箏)	田嶋 直士 (尺八)
古川 羽衣山	渡辺 精一 (笛)	岡 榎本 (箏)	内藤 国枝 (箏)	中野 はるな (箏)	藤舍 成敏 (打楽器)
丹野 井成寿	高瀬 卓郎 (笛)	遠藤 順一 (箏)	永根 玲子 (箏)	山田 明美 (箏)	高橋 明邦 (打楽器・指揮)
仲保申喜男	鶴野 利光 (笛)	木阪 稲木 (箏)	柳田 吉岡 (箏)	佐藤 由香里 (箏)	吉岡 純一 (箏)
藤舎 呂悦	鞍掛 知子 (箏)	榎本 容三 (箏)	町田 勝剛 (箏)	内藤 国枝 (箏)	星 利博 (箏)
稔	戸井 昌造 (箏)	柳家 小三治 (箏)	松井 松原 (箏)	寺島 孝之 (箏)	藤舎 成敏 (打楽器)
三木 増田	星 凤声 (箏)	柳家 小三治 (箏)	宮川 国恵 (箏)	高橋 明邦 (打楽器・指揮)	高橋 明邦 (打楽器)
睦美 旭	増田 晴由 (箏)	高野 文子 (箏)	柳田 正治 (箏)	柳田 正治 (箏)	吉岡 純一 (箏)
張 曜輝	張 曜輝 (箏)	渡辺 容三 (箏)	吉岡 純一 (箏)	吉岡 純一 (箏)	吉岡 純一 (箏)
輔音芸	ハイヴィード・ロープ	高橋 英一 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)
大和精工株式会社	ハイヴィード・ヒューズ	井阪 紘一 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)
西武建設株式会社	ヘンリー・バーネット	岡 遠藤 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)
西武百貨店	ラニイ・シェルダン	榎本 順一 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)
日本オペラ協会		金子 博美 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)
宮園オート		家根 原光子 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)
菱電商事株式会社		龟田 和保 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)
宮園自動車		河野 義博 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)
高橋 克己		近藤 栄一 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)
高橋 國持		高橋 英一 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)
高橋 光生		河野 義博 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)
柳川 創造		柳川 創造 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)
洋一		柳川 創造 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)
星 光和		柳川 創造 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)
藤舎 成敏		柳川 創造 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)
伊藤 惣一		柳川 創造 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)
塚本 早苗		柳川 創造 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)
田嶋 直士		柳川 創造 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)
昭和六十年十二月現在		柳川 創造 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)	柳田 勝剛 (箏)

日本音楽集団 〒151 東京都渋谷区笹塚 3-17-1 滝沢ビル302 ☎03-378-4741